

博士学位論文内容の要旨

学位申請者氏名

小南 妙覚

論文題目

慈覚大師円仁将来目録の研究－入唐求法の活動と成果－

論文審査担当者

主査 綾村 宏 (印)

審査委員 坂口 満宏 (印)

審査委員 谷口 淳一 (印)

本論文は、日本天台宗第三世座主慈覚大師円仁（794-864）が9年余りの入唐の成果として日本にもたらした将来物を記した将来目録と、入唐中の様子を克明に記した行状記録を史料として、彼の入唐求法の具体的な内容を検証し、その将来物と経験を踏まえて円仁が天台宗に与えた影響と成果を論じるものである。

円仁は日本天台宗宗祖伝教大師最澄の高弟であり、日本天台宗を確立し天台密教（台密）の基礎を築いた僧侶として知られる。彼が入唐中に収集し日本に将来した仏書の目録が『日本国承和五年入唐求法目録（承和五年目録）』『慈覚大師在唐送進録（在唐送進録）』『入唐新求聖教目録（新求目録）』の三種作成されている。さらに入唐中の行動を記録した行状記録『入唐求法巡礼行記（巡礼記）』を残しており、その記述と将来目録記載の仏書とを照合することにより、彼の将来物蒐集の目的、行動、蒐集状況を具体的に知ることが出来る。

本論文の構成は、以下の通りである。

序章

第一章 円仁将来三目録『日本国承和五年入唐求法目録』『慈覚大師在唐送進録』『入唐新求聖教目録』の成立過程

第一節 伝教大師最澄による比叡山の開創と天台宗の開宗 第二節 円仁入唐に至る経過と概要 第三節 円仁三目録『日本国承和五年入唐求法目録』『慈覚大師在唐送進録』『入唐新求聖教目録』の撰述とその背景

第二章 円仁将来三目録の書誌学的考察と将来物の概要

第一節 『日本国承和五年入唐求法目録』の書誌学的考察と将来物の概要 第二節 『慈覚大師在唐送進録』の書誌学的考察と将来物の概要 第三節 『入唐新求聖教目録』の書誌学的考察と将来物の概要

第三章 円仁の入唐求法と将来物蒐集の状況

第一節 揚州における求法と将来物蒐集の状況 第二節 赤山・五台山における求法と将来物蒐集の状況 第三節 長安における求法と将来物蒐集の状況

第四章 円仁入唐求法の成果－比叡山仏教の確立を期して－

第一節 比叡山諸法儀の始修と整備 第二節 比叡山諸堂の創建と整備 第三節 比叡山における円仁将来物の保存

終章

まず序章で、承和 5 年（838）円仁が請益僧として入唐する当時の天台教団の状況の把握、円仁将来物を記した将来目録三種の成立事情の究明、将来目録記載の経典・論疏をはじめとする将来仏書を『巡礼記』と照合する作業により円仁の求法と将来物蒐集状況の解明、円仁帰国後に蒐集将来物や入唐求法の成果が延暦寺の仏教に与えた影響の確認、という課題を設定し論を進める。

第一章では、円仁が入唐請益僧に選出された背景と当時の天台教団がかかえていた課題を考察する。最澄は天台宗開宗にあたって止観業（天台、法華経）と遮那業（真言密教、大日経）の設置を理由に年分学生各一名が認められたが、当時の延暦寺では密教部門が弱体で充実させる必要があったこと、第二代天台座主円澄が臨終のとき円仁に託した天台宗が当時抱えていた教義上の課題を記した「円澄疑問三十問」に応える必要があったこと、さらに最澄が夢告で入唐を促したことなどが、円仁入唐の理由であったとする。

さらに三目録の撰述状況を整理し、ともに揚州蒐集将来物を記している『承和五年目録』と『在唐送進録』の関係については、先行研究を整理したのち、以下のように述べる。すなわち開成 4 年（839）4 月 5 日に求得の仏書類は遣唐使第八船に、山東半島沖を航海中に船上において作成した『承和五年目録』は 7 月 14 日遣唐使第二船の栗田録事に、『在唐送進録』にみえる消息「円仁書」は 7 月 21 日に帰国に向かう第二船の栗田家継に託したと考えている。円仁が遣唐使第八船に託した将来物と「円仁書」は承和 6 年（839）以降に比叡山に届けられ、その後延暦寺において朝廷に報告するために『在唐送進録』が作成されたとする。なお『承和五年目録』を載せた第二船は遅れて承和 7 年 6 月に帰国している。『新求目録』は承和 14 年に帰国した円仁が作成した総目録であり、将来物が長安・五台山・揚州の順に記されている。

第二章では、まず円仁入唐将来物を記した三目録のそれぞれにつき、現行活字本の問題点を指摘したうえで、現存写本のうち最古、最良本と判断した青蓮院本（現京都国立博物館蔵）を底本とし、他の諸本との校勘を付した翻刻を行っている。すなわち『承和五年目録』では、青蓮院本と旧個人蔵本（現京博蔵）や四天王寺本など、『在唐送進録』では青蓮院本と比叡山南溪蔵本、叡山文庫蔵池田史宗本など、『新求目録』では青蓮院本と高山寺本、叡山文庫蔵池田史宗本などとの詳細な校勘翻刻を収録した翻刻を提示し、そのうえで円仁入唐将来物個々について、『大正蔵経』収蔵の有無と将来物の内容の検討を行う。

円仁は唐において揚州、赤山・五台山、長安に滞在して求法活動を行っているが、第三章では、その順序にしたがい旅行記録である『巡礼記』の記述と照合し、いつそれぞれの場所でどのような経緯で誰からどのように将来物を入手したかを詳細に分析している。

第四章では、帰国後、円仁が入唐の経験を活かすかたちで比叡山に新しい堂舎を建造し、また唐で見聞し実体験をした法会を始修した様子を多くの史料にもとづき詳述している。それらの法会は現在も執行されており、円仁の入唐の成果が現在に続いているといえるとする。

終章では、各章の論旨を確認したのち、円仁の入唐の成果は天台教学にとどまらず密教、悉曇など広範囲におよんでおり、彼の中国での受法と仏書の将来が総合仏教としての日本天台宗の確立に大きく貢献したと結論づける。





